

そうじの力だより

VOL.189



支援事例紹介

「モノを捨てるからこそ、モノを大切にできる風土が生まれる」

埼玉県三郷市を本拠とする松井産業(株)。大正一一年の創業で、来年は一〇〇周年を迎える老舗企業です。

呉服商として創業しましたが、その後、米穀集荷業、肥料飼料販売、鶏卵卸、食肉卸・販売などを経て現在は、不動産及び建設業を中心に事業展開しています。業種を変えながらも、一貫して、中小企業がいかにして地域の役に立つか、を追求してきました。

そこから導き出された同社の信条が「HQC C」です。すなわち「H」ホスピタリティ「Q」クオリティ「C」クリーンリネス「C」コミュニケーションの四つです。

ということでもともと掃除には力を入れていたことなのですが、あらためてしっかりと取り組みたい、ということで、弊社にオフィアがかかり、一年ほど前からお手伝いをしております。

ところが、実際に中に入ってみると、あまり良くない状態であることがわかりました。一見、キレイに見えるのですが、整った印象がありません。

その原因は、余計なものが多過ぎることにあります。



不要物が多かった建築資材倉庫

「掃除」という



不要な書類を全員で整理しているようす

「掃除」という、掃いたり拭いたりというイメージが強いのですが、まずは不要なものを捨てること

が大事です。捨てないと、実際にキレイにはなりませんし、会社の風土も良くなつていかないので、

①スペースが狭まる

わが日本は、狭い国土の中に多数の人々が生活しています。ただでさえ狭いスペースに不要なものがあれば、それだけで有効活用できるスペースが狭まってしまう。結果としてゴミゴミした印象になり、雰囲気も暗くなってしまう。

②モノをうまく収納できない

「うまく収納法を教えてほしい」という声をよく聞くのですが、そもそも不要なものを収納しても意味がありません。不要なものがたくさんあるので

から、うまく収納できるわけがないのです。結果として、「いつも出しっぱなし」「積んだまま」というような事態を招くこととなります。

③探す時間がかかる

余計なものが多いと、邪魔なものも多く、いざ必要なものを探そうとするときに、時間がかかってしまいます。この「探す時間」は、業務にとっては大きな無駄です。

④本当に大切なものが分からなくなる



使っていないペン類を整理して処分

余計なものが多いと、何が大切なもので、何が大切でないのかが、わからなくなり、ますます、さほど大切にないことに時間を費やすことは、まさに人生の浪費です。

⑤結局はモノを大切にしなければならぬ

モノを捨てようとする、「もったいない」と拒む人がいます。しかし、後生大事に取っておいても、使わないのであれば、それこそ「もったいない」ではないでしょうか。本当に使うものだけに、それを丁寧に扱う、大切に使うことこそ、モノを大切にすることだと思えます。

松井産業で「そうじ」の活動をはじめ、約一年。この一年は、とにかく徹底的に不要なものを捨ててきました。

本部においては、余った建築資材や賃貸住宅の管轄資材、法定の保管期限を過ぎた経理書類などをガサッと捨てました。各拠点においては、不要書類や必要書類以上にストックしてある事務用品も捨てました。中には、書類を捨てたおかげでキャビネが要らなくなり、そのぶん執務スペースが広がった拠点もあります。



キャビネがなくなったY拠点(アフター)



Y拠点の事務所(ビフォー)

そのおかげで、本部、各拠点ともに、ずいぶんスッキリしてきました。社員の意識も上がってきたようです。

まだまだこれからが本番ですが、今後の展開が楽しみです。(小早)

新サービス『環境整備診断』はじめました！御社の「健康状態」を環境整備の観点で診断し、改善策をご提案します。詳しくは弊社ホームページをご覧ください。



そうじの力コラム

私の群馬移住物語②

〜人生を決定づけたインドネシアでの生活〜

非鉄金属を取り扱う商社マンだった父の転勤に伴い、千葉市からインドネシアの首都ジャカルタに引っ越したのは、小学校五年生の三学期でした。

「帰国子女」は「英語が話せる」というふうな早合点されてしまいがちですが、インドネシアの言語はインドネシア語であり、英語が話せるようにはなりません。

しかも、日本人学校に通っていたので、先生も生徒も日本人で、授業内容はほぼ日本の学校と同じですから、日本での生活とさほど大きな違いはないわけです。

日本人学校というのは、日本全国から生徒が集まってくるわけですから、そこでの会話は当然、「標準語」になります。しかも、同級生は私と同様に転勤族の子供が多いので、「郷土色」は弱まります。

そうになると、私の意識の中でも、ますます「故郷」という觀念が薄れてきます。そんな環境の中で、逆に育まれてきたアイデンティティが、「日本人」という意識です。

日本人学校では、毎朝授業開始前に、全員が校庭に出て、ラジオ体操を行います。体操終了後に必ず行われるのが、日本とインドネシアの国歌斉唱及び国旗掲揚です。

これをつらうじて、お世話になっているインドネシアに対する尊敬の念と、祖国日本に対する誇りを植えつけようという狙いだと思われませんが、私もその狙い通りに育ちました。

「クニはどこ?」と聞かれて、「山口」とか「秋田」と答えられる土地はないもの、

私にとつての「クニ」とは、他ならぬ「日本」だったわけです。

このインドネシアでの生活は、私にとつて、その後の人生を決定づける大きな転機となりました。それは、「日本の常識は世界の常識ではない」ということです。

たとえば、日本で郵便ポストといえば赤色ですが、インドネシアではオレンジ色です。日本人が食事するときには、箸かフォークやスプーンを使いますが、インドネシア人は右手の素手を使って食べます。

どちらが良くて、どちらが悪い、ということではありません。そのような「違い」があるということなのです。

日本で日本人として生活していると、皆が同じ考えの下に、同じような行動をとるために、自分や他人が行っている行為を、「これは本来望ましいことなのか?」とか、「いったい何のためにやっているのか?」といったことに疑問を持たずに育ってしまいます。

しかし私は、このインドネシアでの生活をつらうじて、「常識」と言われていることに疑問を持つようになりました。色々なことに対して、「それって、本当なのか?」「それは望ましいことなのか?」「そもそも、なぜそんなことをしているのか?」というふうな、いちいちケチをつける癖がついてしまったのです(笑)。

インドネシアには、中学二年が終わるまでの三年三か月住んでいました。思春期で一番多感な時期をここで過ごしたことが、その後の私の生き方を決定づけることになりました。「続く」 (小早)

編集後記

小銭の恨み

今や、地方のローカル私鉄でもICカード改札が整備されている現代において、かたくなに切符のみの改札を続けているのが、埼玉県北部を横断する秩父鉄道です。

しかも、駅の自動券売機で、510円の切符を買うために、1010円を入れると、なんと、500円玉ではなく、100円玉が5枚出てきて、私は思わず、「オイッ!」と声に出して叫んでしまいました。



小銭ジャラジャラが嫌いな私にとって、秩父鉄道は鬼門です…。 (小早)

飛鳥のつばやき

夜中は兄貴の時間

日中は次男に邪魔され、大好きなレゴを思う存分につけない長男。

夜布団に行くと、「絶対に眠るまい」と目を見開き、ゴロゴロ転がり、次男坊が静かになると起き上がってそーっとリビングに戻り、レゴやらテレビやらを堪能する立派な夜更かしマンとなっていました。

ゆっくりコーヒーを飲んだり、本を読んだりする時間は、まだまだ訪れそうにないなあ。 (大概)



株式会社そうじの力

そうじで組織と人を磨く、
日本で唯一の研修会社

弊社は「そうじ＝環境整備」を通じ

た「企業風土改革」を支援します。

講義、実習、チームミーティング、計画作り、現場検証を通じて、社長と社員の意識改革を図り、健全な企業風土作りをお手伝いします。

支援期間は1年から。毎月1回訪問を原則としますが、状況とご要望に応じて、プログラムをオーダーメイドします。また各種団体向けの講演のご依頼も受け付けております。(全国対応)

Youtubeチャンネル公開中! たくさんの方の企業の「そうじの力」の導入事例を動画で紹介しています。「そうじの力」で検索してみてください!